

# 神仏と能

● 鎌田東二

## — 神道と仏教から見た能の信仰世界（十四） —

### 『朝長』と『烏帽子折』 — 申楽と仏教（9） —

今回は思い切って、私的な観点から『朝長』や『烏帽子折』にアプローチしてみる。

能にとって、『平家物語』は格好の重要な素材であり、最高の本歌とも言える原曲でもあった。哀切な琵琶に誘われて語られる平家一門の栄光と滅亡は、それを聴く者の哀切の情をいたく刺戟し、その調べはいまだ痕跡を残したなまなましい傷口と哀傷を持っていた。『平家物語』の完成と朗唱歌詠を通して、

「死」と「史」と「詩」がひとつらなりの物語的結構を持つリアリティとして迫ってくる。そのような民族の叙事詩が誕生したのである。

世阿弥を始めとする能作者たちは、『平家物語』に材を採りながら、その一つ一つの「景」を存分に幽玄にして哀切な歌舞に仕立てていく。囃子方もきりきりと心魂に切り込み揉み込むような激しさと悲嘆の情調を盛り上げる。能は悲哀の構造を可視化する。一つの演劇の様式の中に見える化する。それによってメタレベルでのスキヤニングができるようになり、このような執著しゅうじやくの可視化によってそこからの離脱をセッティングできる。能が鎮魂供養やケアの芸能と考えられるゆえんである。

目の前には「死」がある。崇徳上皇が讃岐に流されて憤死した保元の乱（一一五六年）以後、戦乱による死が相次いで起こる。のみならず、『方丈記』が詳細にドキュメントするように、大地震や飢饉や竜巻や大火による自然災害などによる死も数多起こってくる。時代は多死時代の末法の世に突入している。このような時、人々はなぜこんな世の中になってしまったのかと歴史の道理を訊ねることになる。

慈円は、怨霊にも道理があり、世を乱し、人を滅ぼし、災いをもたらすことがあるという。怨霊は憎悪を持ち、深く恨みに思う人を仇にして取り憑き、一つの家から天下に広がり、讒言や虚言を作り出して見えない方法で恨みをはらすという。がゆえに、神仏に祈り、怨霊を鎮めるための処方が必要となる。その怨霊調伏の処方が鎮護国家の霊的国防装置としての仏法である。慈円の怨霊史観は天台密教を総動員した加持祈祷による調伏史観であり、それが稀代の叙事詩である『平家物語』の歌曲の創作を促進させることになった。

天台座主<sup>ざす</sup>を四度も務めた慈円はそのような歴史の

道理を考えぬいて『愚管抄』を著した。「死」を通して「史」を透視していった。このような世の中になつていく歴史の「道理」というものがある。それを慈円は見通しながら保元の乱以後はみな「武者の世」で「乱世」であると、歴史の区切りをつけていく。句読点をつけて、歴史を見、読むようになる。「これ以前」と「これ以後」とはまったく異なる。そのような歴史的分岐点というものがある。その歴史的分岐を生む道理もある。慈円は比叡山に住みながら、時代を区切り、また貫く道理なるものによっておのれや後鳥羽上皇を納得させようとした。こんな武者の世になつてしまった事の道理。それによって自分を説得しようとしたが、事はそれだけで済むはずはない。時代は歴史を可視化する、見える化する装置を求めた。それが『平家物語』の創出となっていく。つまり、「死」が「史」を呼び出し、「史」が「詩」を生み出したのである。民族の叙事詩としての『平家物語』はそのようにして誕生した。

「詩」なくして我々の心魂は鎮め慰められない。収まりきらない。生きるために人は物語を必要とす

る。それは一種の「神話」のようなものであるが、そのような神話的物語を支えにすることによって、時代の激変に耐え抜くことができる。『愚管抄』も『平家物語』もそのような、語れば血の出る「死―史―詩」の連環を内包する物語創出であった。

能『朝長』は、その『平家物語』を本説にしたものではなく、源平の合戦に先行する保元の乱に続く平治の乱（一一五九年）の物語を元になっている。この作者が元雅であるかどうか、確定する根拠はないが、もしこれが元雅作であるとすれば、元雅が父子の別れの悲嘆を繰り返し取り上げていることの意味を再確認させられる。『弱法師』や『隅田川』や『朝長』には繰り返し親子の別れや再会や死別が取り上げられ、そこに「受難能」とも言える悲嘆の深掘りの苦汁が見えてくる。元雅にはどこか自虐的な、進んで受難や受刑に向かう悲愴感が漂う。

さて、『朝長』は次のようなワキの語りから始まるが、そこに平治の乱のことが出てくる。

「これは嗟峨清涼寺より出でたる僧にて候。さてもこの度平治の乱れに、義朝都を御開き候。中にも

大夫の進朝長は、美濃の国青墓の宿にて自害し果て給ひたる由承り候。我等も朝長の御所縁おんゆかりの者にて候程に、急ぎかの所に下り、御跡をも弔ひ申さんと思ひ立ちて候」

まず『朝長』は、平治の乱で敗死することになる源義朝（一一三三―一一六〇）の二男の源朝長（一一四三―一一六〇）の元家臣であった京都の嗟峨の清涼寺の僧（ワキ）が、平治の乱で自害し果てた源朝長を弔おうと、美濃国大垣の青墓の宿にやって来、里人（アイ）から墓所を教えられ、そこに行くと、青墓の宿の長（前シテ）が、朝長の自害の顛末を語り、朝長の菩提を弔ってくれるよう頼むところから始まる。

そこでその僧が「観音懺法」を以て菩提を弔っていると、朝長の亡霊（後シテ）が甲冑姿で現われて、「魂たまは善所（極楽浄土）に赴けども、魄はたは修羅道に残つてしばし苦しみを受くるなり」と訴える。

源朝長の鎮魂供養をゆかりの深い元家臣の僧が「観音懺法かんのんせんぼう」を以てするとう筋立てであるが、その中で、朝長の最期が詳しく物語られる。その「死の物語」なしに鎮魂も供養も成立しない。そしてそ

前へーッに  
ルビを入れたの  
くりました

のような「死の物語」が「保元平治の世の乱れ、如何なる時か来りけん」というシテの「史の位置付け」の中に収められる。「死」と「史」が『朝長』という一曲の「詩」として謡い舞われることを通して鎮魂供養は完成し、「魂魄」の成仏も果たされる。

『朝長』の小書「懺法」では、特別に太鼓が低い地響きの唸りのような調子で奏されるという。この最高度に低音部の音を響かせることによって「観音懺法」の「法」を成就させようとしているのだろう。

『朝長』の前場の途中、ワキの僧は「自害」したという朝長の「御最期の有様委しく語つて御聞かせ候へ」とシテの長者に頼む。すると、長者は朝長の最期を次のように物語る。

「申すにつけて傷はしや。暮れし年の八日の夜に入りて、門を荒けなく敲く音す。誰なるらんと尋ねしに、鎌田殿と仰せられし程に門を開かずれば、武器したる人四五人内に入り給ふ。義朝御親子、鎌田金王丸とやらん。わらはを頼み思し召す。明けなば川舟に召され、野間の内海へ御落ちあるべきとなり。また朝長は、都大崩にて膝の口を射させ、とかく煩

ひ給ひしが、夜更け人静まつて後、朝長の御声にて、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と二声のたまふ。鎌田殿参り、こは如何に朝長の御自害候と申させ候へば、義朝驚き御覧ずれば、はや御肌衣も紅に染みて、目もあてられぬ有様なり。その時義朝、何とて自害しけるぞと仰せられしかば、朝長息の下より、さん候都大崩にて膝の口を射させ、既に難儀に候ひしを、馬にかかりこれまで参り候へども、今は一足も引かれ候はず。路次にて捨てられ申すならば、犬死すべく候。ただ返す返す御前途をも見届け申さで、かやうになり行き候事、さこそ言ひかひなき者と、思し召され候はんずれども、道にて敵に逢ふならば、雑兵の手にかからん事、余りに口惜しう候へば、これにてお暇たまはらんと、これを最期のお言葉にて。こときれさせ給へば、義朝正清とりつきて、嘆かせ給ふ御有様は、外の見る目も哀れさを何時か忘れん。」

朝長の最期が詳しく語り聞かされる。『朝長』の最後の方では、「昔は源平左右にして、朝家を守護し奉り、御代を治め國家を鎮めて、萬機の政事直な

りしに、保元平治の世の乱れ、如何なる時か来りけん。思はざりしに弓馬の騒ぎ、偏ひとへに時節到来なり」と謡われ、保元・平治の乱から世が乱れ一気に戦乱の世に突入していくという時代認識が示される。

能『朝長』では朝長の最期の時に第一発見者となったのが鎌田正清まさよし（一一二三―一一六〇）とされるが、『平治物語』などでは父義朝が朝長の最期を手にかけてたとされている。それはともあれ、ここに源義朝の乳兄弟で一の家臣であった鎌田正清の名が「鎌田殿」とか「正清」とかと何度か出てくる。その鎌田正清が我が家の先祖にあたるのだが、この朝長の最期を看取った後、主君の源義朝とともに愛知県知多半島の内海に逃げ延びて、正清の妻の実家で酒を飲まされて騙し討ちにされた。私は子供の頃、婿養子であった父親がこのことを繰り返し語るのを、それこそ耳にタコができるほど聞かされた。満州での戦争体験や特攻隊に散っていった同期の桜の戦友のことを思い出した際に語り聞かせられたのには閉口したが、それを黙って聞くほかなかった。この出来事があったために、我が家では正月に一切の酒断ちをし、酒

や酒器類をすべて家の外に出す徹底ぶりだったので、お屠蘇を飲むこともできず、一年の最大のハレの日を体験することなく大きくなった。そんな我が家の家伝的物語があつて、私は中世という時代に関心を持たざるを得なかったし、能に関心を持つはめにもなり、同時に鎮魂供養のこゝろを含め、時代時代の戦乱をどのように鎮めていく道があるのかを探究し続けて今日に到っている。愛知県知多郡美浜町にある「野間大坊」と呼ばれる大御堂寺の境内には、そこで「郎等ろうどう鎌田次郎正清ガシウトニテ内海うちみのしやうじ莊司平忠致むね」（慈円「愚管抄」）に殺害された源義朝の剣塚と鎌田正清とその妻の墓がある。

能『烏帽子折』には、この鎌田正清の妹が烏帽子屋の妻阿古屋の前として登場し、立派に成長した牛若丸を見て涙する場面がある。鞍馬寺から脱走した牛若丸が烏帽子屋を訪ねて東男に変装しようとするのだが、平氏の世であるにもかかわらず烏帽子を源氏の系統であることを示す左折するように頼む。そこに鎌田正清の妹であった烏帽子屋の妻阿古屋が登場して牛若丸と会つてともに涙する。

シテの烏帽子屋の夫から牛若丸の刀を見せられ、ツレの阿古屋は語る。「恥かしや申さんとすれば言の葉より、まづ先だつは涙なり。今は何をか包むべき。これは野間の内海にて果て給ひし、鎌田兵衛正清の妹なり、常磐腹には三男、牛若子生まれさせ給ひし時、頭の殿ごうよりこの御腰の物を、御守刀にとて参らせ給ひし、その御使をば、わらは申してさむらふなり、傷はしや世が世にたましまさばかく憂き目をば見まじきものを、あら浅ましや候。」夫はこれまで妻が鎌田正清の妹であることを知らなかった。妻はそのことを心深く隠していた。それを今こそ開陳したのだ。そして二人して涙ながらに牛若丸と会い、「げにいま思ひ出いだしたり、もし正清が所縁ゆかりの者か」と問われ、「御目の程の賢さよ、わらはは鎌田が妹に」と答えると、すかさず子方の牛若丸は「阿古屋の前か」と言い当てる。この互いの素性を告白し合う場面は、『烏帽子折』前半部のクライマックスである。

『義経記』には、鞍馬山を出奔する前の牛若丸にその素性と父源義朝の死の顛末を伝えたのは、鎌田正清の子の鎌田三郎正近（光政ともいう）とされ、「お

ママのうかがい読みやすいと思いに

そろしき者の子孫なり」と記されている。「おそろし」には「尋常でない」という意味があり、正清は尋常でない死に方をした乱世の武者であった。

ところで、江戸中期の浮世絵師である鳥山石燕とりやませきえん『百器徒然袋ひゃくきつたらんぶくろ』には「鞍野郎くらやろう」と呼ばれる妖怪が出てくる。その妖怪は、「保元の夜軍に、鎌田政清手がらをなせしも、我ゆへなればいかなる恩もたぶべきに手がたをつけんと、前輪のあたりをきりつけらるれば、気も魂もきえぎえとなりしとおしみて唄ふ声、いとおもしろく夢のうちにおもひぬ」と解説される。策略によつて主君源義朝とともに殺された正清（ここでは「政清」）が使用していた馬の鞍が変化して生まれた妖怪であるという。

妖怪変化はともかく、正月に酒を飲むと祟りが起こると脅されて育った私にとつては、『保元物語』も『平治物語』も『平家物語』も、またそれらを元に作られた能の曲の数々も切実至極のグリーンフケアやスピリチュアルケアとなり、「観音懺法」をも伴う鎮魂供養の儀礼にほかならないのである。

（京都大学名誉教授・上智大学グリーンフケア研究所特任教授）